

# 持続可能なリンゴ栽培を考える

## リンゴ生産の現状と方向とは

### ●雇用労働力の変化

平成元年以降、高齢化による担い手不足を背景に、本県のリンゴ栽培面積は減少に転じている。リンゴ栽培は摘果、着色管理、収穫などの作業時期に人手が必要となるため、人員不足を雇用労働に頼っているのが現状で、労働力が確保できない場合、そのまま栽培面積の減少へとつながっている。

しかしながら、近年は農業分野でも最先端技術の導入が進んでおり、補助労働力の確保対策には、スマートフォンを活用した1日農業ハイトアプリ「day work」の利用者が急増している。若い世代を中心に浸透しつつあるこの1日農業ハイトは、求職者に必ずしもリンゴ作業経験を求めている。そ

の上、好きな日時を選択し、農家側と条件が合えば雇用が成立するものだ。そのため、今までにないほどの高いマッチング率を叩き出している。人手不足を解消させる、今後の有効的な手段といえる。

このアプリが普及したことで、農家側も雇用に対する意識が徐々に変化してきた。熟練した作業員が高齢化し、継続して雇用することが難しくなっている現在、経験のある人を継続的に雇用するスタイルから、初心者育てながら、必要な時期に雇用を目指すスタイルへ意識が変化してきている。熟練した雇用者よりも、必要な時期に一人でも多く雇用できることで、今後の労働力不足解消に結びつくのではないだろうか。

生産性向上の観点からは、良食味で高品質なリンゴ生産を基本としながらも、省力樹形や農業機械の導入による省力・軽労化も必要だ。急傾斜地から平場へ移行していることから、自動草刈機なども将来的に効果的であろう。

当JAでは、令和3年3月以降、リンゴの取扱いについても見直しを行っている。本年のように、リンゴの花が多い年や、例年よりも多くの労力を

必要であることが予想される場合、予め対策を立てることが肝心となる。

剪定時期から受光態勢等を考慮した樹形を目指し、昨年打ち出した「簡易栽培サンふじ」等の活用も視野に入りたい。農家の収量維持と産地の生産量維持へと繋がっていくはずだ。

近年、リンゴの値段が高止まり傾向で推移している今、もう一度私たちはリンゴ経営について見直



近年の課題を解消する取組みをまとめた冊子  
(令和3年3月発行)

しを図り、所得増大に向けて、労働力事情を生産面と併せながら考え直してみたい。

### ●品種の動き

主力品種である「ふじ」が不動の地位を築き上げている一方、近年はシナノゴールドやトキ、名月などの黄色品種への関心が高まっている。前段にもあるように、これは労働力不足を背景に、つくりやすさという点が一番の理由だろう。

増加傾向にある黄色品種については、未熟果出荷による消費者離れや、大幅な数量増加で価格が暴落することに気を付けなければならぬ。さらに、作業面でも晩生種の収穫に遅れがでないよう注意したい。

本県の強みである周年供給体制の維持を見据え、販売戦略を考慮したリンゴ生産を進めていくことも必要だ。11月下旬から始まる贈答シーズンに対応できるような品種構成割合を、産地一体となって見直すことが大切であり、それはJAの選果施設における人員確保にもつながってくる。計画的な出

荷でより高い精算ができるよう、生産から販売まで一体となって「持続可能なリンゴ栽培」を考え、飛馬ブランドが維持できれば最高の形ではないだろうか。

### ●対策のポイント

高品質リンゴの安定生産のため、樹勢に応じた適正着果量の確保が重要である。早期適正着果や見直し摘果、樹上選果の徹底により果実品質の向上を図っていくためには、やはり摘花及び摘果剤の導入も選択肢となってくる。

結実量確保の観点からは、近年、ふじの開花率がほぼ同じ数字で推

移していることに対し、中心果結実率は大幅に下がっている。これは、摘果の際に、素質の良い中心果を選ばなくなっていることを示している。温暖化などの影響により、気象条件に対応したリンゴ栽培が今まで以上に求められてくる中で、人工授粉などの交配作業を少しでも多く実施できれば充実した中心果の確保にも繋がるのではないだろうか。

さらに、雇用の観点からも、授粉の時期から人手を確保して取り組むことで、後半の人手不足解消にも繋がり、その年の継続的な雇用を生むのかもしれない。



本年産の着色課題を念頭に、せん定作業を進めることが重要

葉摘み等の着色手入れについては多くの労力が必要とし、過度な葉摘みは着色や糖度、蜜入りなどの品質にも悪影響

響を及ぼす。着色管理は、剪定による樹形の改善や支柱入れ、徒長枝整理などの受光態勢を整えることを基本とし、葉摘みは適量にとどめることが求められている。これらを考慮すると、これから始まる剪定は、本年を振り返りながら作業を進めていくことが重要であり、「持続可能なリンゴ栽培」に向けては剪定時期から計画的に実施することが大事である。

「良品多収」を目標とすることが所得向上の第一歩ではあるものの、品種や雇用の有無など、経営状況に応じたプラン作りが所得向上の近道となる。

当JAにおいては、推奨する着色優良系統の苗木代に、一部助成して着色管理の軽労化を進めていることから、個々の経営に合わせて「つがる」や「ふじ」の改植更新を考えてみるのも一つではないだろうか。

労働力の軽労化とJAへのリンゴ入庫数量確保に向けて、今後時代にも合った栽培プランの提供に努めていきたい。

(参考：りんご栽培指導要項)